

地域交流から にぎわいのあるまちを目指して

高山市長 國島芳明



日本のラサ、高山

「その先に見える街並み、大きな市街地こそがわが国のラサともいべきか、海拔5700有余m、これこそが、あこがれの高山町である」明治37年、人類学調査に随行した旅行記者、堀内新泉は高山のことをこう評した。高山は周囲



富山の魚屋から奉納された絵馬

を山に囲われ、どこからやってくるにしても山を越えなくてはならない。かつては徒歩で富山まで2日、岐阜までは3日かかった。鉄道が通り、道路網が発達した現在でも峠やトンネルを抜け、高山の町の灯りが見えると心休まるのは、高山に住む多くの人が感ずるところである。

しかし、そうした深山の都市というイメージとはうらはらに、各地との交流は盛んに行われた。特に富山方面との交流の歴史は古く、寛文5年(1665年)には富山の魚屋連中が高山城主の病氣平癒、武運長久などを祈って絵馬を寄進している。富山からの海産物の筆頭に挙げられるのはブリであった。冬に富山湾で捕れるブリは脂がのって非常に美味であ

り、富山から高山を経由して「飛騨ブリ」として長野県まで運ばれていた。

街道と一体の高山の町

高山の城下町を築いた戦国武将、金森長近は、防備を固めるとともに、街道を町の中へうまく引き込んでいた。先のブリについては北方面、越中街道から高山へ持ち込まれた。その他平湯街道、江戸街道、尾張街道、郡上街道が、それぞれ高山の町を中心に放射状に広がっていた。城下町に引き込まれた街道のいくつかは、城を一直線に見通せるように計画されており、街道を通ってやってきた旅人に、高山城は威容を誇っていたにちがいない。

城下町としてスタートした高山

であったが元禄5年(1692年)、金森氏は出羽国上山(山形県上市市)に転封となり、以後幕府の直轄地となった。この時、大多数の武士が姿を消し、ほとんど町人の町となった。それでも高山の町は街道の結節点であるという地の利を生かし、商都として発展をしていく。



大正11年地形図「高山南部」



無電柱化事業が終わった後の大新町の町並み

街道の往来が盛んになるにつれ、町家も街道沿いに町の外へ広がっていった。大正11年の1万分の1の地図を見ると、旧城下町を中心に街道沿いに町が広がっていった様子がはっきりと分かる。平成17年に重要伝統的建造物群保存地区として選定された高山市下二之町大新町は、旧城下町である下二之町と、越中街道沿いに形成された町を主体としている。現在、本市では同地区内の建物の保存のため、修理修景や防災などの事業を行っている。無電柱化の事業も平成25年度に完了し、街道の景観がよみがえり、かつて高山城のあった城山を見通すことができるようになった。地区内には、外国

人を含めた観光客の姿が比較見られるようになってきている。

日本の高山から 世界のTakayama

街道の要衝であることを生かし、商業都市として栄えてきた高山は、現在その取引相手を海外に求めている。平成24年には『高山市海外戦略ビジョン』を策定し、具体的なビジョンとして「海外とのつながりによる活気と誇りに満ちた国際都市『飛騨高山』」を掲げた。誘客促進、販売促進、交流促進を3つの目標とし、それに向けさまざまな戦略を立てている。誘客促進については昭和61年に国際観光都市宣言を行い、以後多言語による情報発信やおもてなしの強化などの取り組みを行っている。販売促進については伝統工芸品や飛騨家具、飛騨牛などの海外展開を図っている。また、昭和35年のアメリカのデンバー市との姉妹都市提携を皮切りに、中国麗江市、ルーマニアのシビウ市、ペルーのウルバンバ郡、フランスのコルマル市およびコルマル都市圏共同体などとの交流を行っている。

かつては山間の小都市だった高

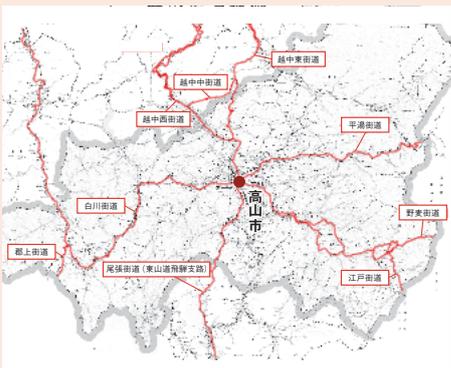
山が、街道を通じた交流を通じて発展し、現在その街道は世界へ伸びようとしている。明治から昭和にかけて活躍した高山の文化人、福田夕暎は昭和6年に「観光客誘致の第一義は『親切第一』である」と記す。80年以上前の言葉だが聞くべきところがある。おもてなしのこころを持ちながら、にぎわいのあるまちを目指しているところである。

高山への五つの街道

一口メモ

飛騨高山・五街道

金森氏は飛騨へ入国後、東西南北の街道を町人地で接続。東は野麦峠を越えて江戸方面へ（江戸街道・野麦街道）、南は宮峠、あるいは刈安



峠を越えて尾張、京都方面へ（尾張街道）、西は白川郷、郡上方面へ（郡上・白川街道）、北は越中方面へ（越中街道）と整備された。また、東方面へは平湯峠（平湯街道）、安房峠、あるいは中尾峠を越えて信州へ出る街道も寛政年間に時期を限って、道を開いたことがあった。

高山城と武家屋敷の下方には町人地が造られたが、主要街道が町人地に集められたためもあって、商人の流通経済力は大きく、越中の塩、魚、薬などの輸入と信州への輸出、飛騨の木材資源などの輸出によって大いに潤った。

金森氏が出羽国へ転封になった以降も商人たちはこの地に留まり、経済活動を活性化するとともに、東西文化の摂取につとめた。



ウルバンバ郡との友好都市提携調印式の様子（平成25年8月25日）

企画協力…全国街道交流会議「街道交流首長会」